
おうどキングダム

N I S I O I S I N

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おうどキングダム

【Nコード】

N4637U

【作者名】

NISIOISIN

【あらすじ】

箱庭学園に現れたとある”超越者”が
繰り広げる学園コメディ

………戯言だけどね

都城王土の百八の能力の詳細

その1

『王の才宝』《おうのさいほう》

『所持・管理』のアブノーマル

異常・過負荷を問わず無限にスキルを所持することができる
また、状況に適したスキルを即座に選び出すこともできる

その2

『索死』《サーチアンドデストロイ》

『探知』のアブノーマル

使用者を中心に半径1キロ以内の生物・無機物を問わずあらゆる物を探知する

デフォルトでは、『検索：人間』になっている

その3

『幽心論』《プリズンハート》

『無心』のアブノーマル

心を閉ざすことで読心や洗脳などの精神攻撃を無効にする

その4

『血魅盲了』《ブラッディースレイブ》

『魅了』のアブノーマル

自分の姿を見られるだけで相手を奴隷にできる強力な異常
欠点として同じ血液型の人間にしか効かない

その5

『闘視力』《パワースカウター》

『計測』のアブノーマル

相手のあらゆる”力”を数値化して透視する異常

その6

『縮退路』《ショートカット》

『移動』のアブノーマル

対象との距離を0にする異常

ただし、対象を視界に入れておかなければ発動しない

その7

『手者選択』《マジックハンド》

『選択』のアブノーマル

右手で触るものを選択することができる異常

選択したもの以外は触れずにすり抜ける

その8

『王言律』《ゴールデンコード》

『支配』のアブノーマル

あらゆるスキルを支配する異常

『理不尽な重税』で奪ったスキルに使用することで王土が100%
の力で使用できるようになる（擬似的な黒神めだかの『完成』）

その9

『幻実感』《ホロウリアライズ》

『幻惑』のアブノーマル

幽霊のように身体が実体を持たなくなる

物理攻撃は完全無効

持続時間15秒、インターバル30秒

その10

『天知解闢』《ジェネシス》

『解明』のアブノーマル

自分の知らない謎を解き明かす異常

その効果は未来には及ばない

その11

『曲伏戯』《ドラマティックディストーション》

『歪曲』のマイナス

あらゆるものを歪め、捻じ曲げる過負荷

物質や精神だけでなく、歴史・常識といった概念的なものも歪める

ことができる

その12

『籠もり歌』《ナイトメアマーチ》

『催眠』のマイナス

声を聞かせることで発動

相手を強制的に睡眠状態にして夢を見せたり、言葉を脳内でリピー

トさせる過負荷

大抵は悪夢や呪いの言葉をリピートさせて精神を破壊することに使われる

宣誓（前書き）

最近掲載位置が上がっていて
読むようになったらすごく面白かったためだかボックスです

不定期更新になりそうですみません

宣誓

「黒神……お前、生徒会長にならないか？」

殴り合いの末に”黒神めだか”という人間の本质を知った。知られざる英雄『日之影空洞からの言葉だった

日之影は黒神めだかの無防備なまでの人間へのまっすぐな信頼と、敵であった自分をも

同士だと信じていたという事実を知った時、黒神めだかなら自分の後継に相応しいと確信したのだった

—
一年後

「世界は平凡か？」

「未来は退屈か？」

「現実 is 適當か？」

「安心しろ、そんな些^{オレ}末な事など問題ない
お前達は我が箱庭で王を楽しませるよう懸命に生きるがいい

——そう、箱庭学園第98代の生徒会長であるこの王、^{キング}
の統治の下でだ」^{オレ} 都城王土

生徒会役員（前書き）

この小説の都城王土と行橋未造は1年生です

生徒会役員

よお、俺の名前は人吉善吉

一年一組に籍を置く至^{ノーマル}って普通な人間だ

そんな俺は今、生徒会長の命とやらで生徒会執行部へ連れて来られたのだが……

(趣味丸出しだ………)

さすがは生徒会長をキングと^{のたま}言う人だ

金の反射光が眩しいは、玉座なんか置いてあるは………

「……………」

俺の隣りに立つ非常識の体現たる幼なじみの黒神めだかでさえも、この光景には声が出ないようだ

「……………ところでめだかちゃん、件の生徒会長様はどこにいるんだよ？」

ていうか、何で俺まで連れて来られたんだよ

「さあな、とりあえずはこの部屋で待っているしかなかるう——

——それと、貴様を連れて来たのは私の意志だ
生徒会長は特に関係ない」

「人の心の独白を読まないでくれ……じゃあ俺が来る必要なんて無かつ」

「いつまで王の道に突っ立っている。」

——たんじゃねえか、なんて続く言葉が発せられることは無かった

何なんだ？このデビルやべえ奴は

仮にも黒神めだかという化け物の幼なじみを十三年やってきた……
それでも、こんなにも——自分と同じ人間だと思えないのは、初めて
の経験だった

「それは済まなかったな。入るぞ、善吉」

「お、おう」

「ふむ、其れで良い」

「さて、よく来た。歓迎するぞ、黒神めだかとヒトキチよ
しかし、王は黒神めだかのみを参らすよう頼んだ筈だか……どうい
うことだ？行橋よ」

行橋？いったい誰のことだ？

「えへ！ボクはきちんと伝えたんだから、それは黒神さんに聞いて
くれよ」

……なるほど、どうやらこの学園は奇人変人のびっくり箱だった
らしい。何だよその仮面は、ガスマスクかよ

「だそうだが黒神よ、そいつはお前が連れて来たのか」

「ああ、そうだ。その必要があると思ったからな」

「ふむ、確かに遅かれ早かれヒトキチも招くつもりだったところどこだ、良ししよう」

さて、本題に入ろうか黒神めだか」

「いいだろう、何のつもりで私をここに招いたか、聞かせてもらおう」

「なに、至極当然のことよ

黒神めだか……………お前は我が妻になるのだ」

……………は？

「……………え？」

本日2度目となるめだかちゃんの呆然とした表情……………しかも今回は口までだらしなく開いている

「そうだな、分かりやすく言えば一目惚れだ」

「あ……………」

な！めだかちゃんが赤面だと……………じゃねえ！

「おいどういことだよ、普通こは”副会長に任命する”とかそういう場面だろ！？」

「何を言っているヒトキチ、それは同じことだろう
副会長になるということは、生徒会長キングの隣りに立つということだ
つまりそれは、王の隣りに立つ女王のことだ！」

何……………だと……………！？

「都城同級生……………妻になることは別にして副会長に就くことに異論はない
しかし、善吉について貴方がどう思っているか聞きたい」

さすがめだかちゃんだ、もう平静を取り戻している

それにしても、貴方……………ね

「ふつ、別に答えを急くつもりはないさ。妻になることについては
王もじっくり考えて欲しいさ

さて、ヒトキチのことだったか……………簡単なことだ、コイツがお前に
必要だと思ったからだ。現にヒトキチは選挙中常にお前のそばに居

たではないか」

この人選挙中からめだかちゃんに目をつけてたのか……

「えへへ！その通りだぜ人吉くん

王土は選挙活動中の黒神めだかに一目惚れしてその隣りに立つ……

…というか隣りに立たせる為に立候補して生徒会長になったんだ」

だから心を……

「それはおかしいのではないか？都城同級生よ

貴方は私を妻にしたいと言った。しかし、善吉を私のそばに置くと言う。矛盾しているぞ」

「おかしいことなどない。どうやらお前は”隣り”を知らないようだな

黒神よ、どんな人間でも隣りは2つあるではないか

王^{オレ}が王として女王^{おまえ}の隣りに立ち、ヒトキチ^{ナイト}が騎士として女王の隣りに立つのだ」

「……………そうか、貴方のことが良く分かったよ

……………よかるう。都城同級生よ。私と善吉、共に生徒会執行部への入部を誓おう」

「ふむ、承ろう

そして、黒神めだかを生徒会副会長にヒトキチを生徒会庶務に任命する！」

……それと黒神よ、都城同級生などではなく気軽に王土とよぶが
良い」

「それは今後の貴方次第だよ、都城会長」

俺の意志は路傍の小石のごとく無視ですか………

「えへへ！それくらいでしょげるなよ人吉くん」

生徒会役員（後書き）

この小説の都城王土は生まれつきもつある異常のおかげで『支配』の異常を完璧にコントロールしています
なので原作よりも性格が丸くなっています

朝

—— 都城王土の朝は己の投影に始まる

大抵の一般人が毎朝自分の姿を鏡で確認するように、彼も偉大過ぎる己の姿を確認するために最も自分に匹敵しうる大きさをもつ太陽を己に見立てているのだ。曰わく、「地球は王^{オレ}にとって小さ過ぎるらしい

「……さて、行橋よ。ここまでついて来た理由を聞かせてもらおう。出てくるがいい」

突然、王土が虚空に向けて言葉を投げかける。そして先程まで都城王土しか居なかった時計台の上にもう1人の人間の姿が現れた。

仮面を被り、背丈が低い、男か女がよく分からない人物—— 行橋未造であつた

「えへへ！変装術の応用で上手く気配を隠していたつもりだったんだけどね！『探知』の異常でも使われたのかな」

「ふん……我が百八ある『王の才宝』の1つ、『^{サーチアンドデストロイ}索死^{オレ}』はデフォルトで常時発動状態だ。致し方あるまい。それより、王はまだお前の答えを聞いていないぞ」

「ああ、ごめんよ。どうしても王土に聞いておきたい事があつたからね！」

「ふつ……『受信』の異常をもつお前が聞きたい事とはな」

「いや。王土は『幽心論』^{プリズンハート}もデフォルトじゃないか。ボク程度の異常でお前の異常に適うはずがないだろ。」

「当たり前であろう、行橋よ」

「……………全く。それとボクの聞きたい事はね、本当に黒神めだかに惚れてしまったのかだよ。わざわざ欠陥品の異常まで使って生徒会長にもなっちゃうしさ」

そこはかとなく不満げな様子である行橋の質問に対して王土は至極当然であるかのように答える

「もちろん事実だ。そうでなければお前の言うとおり欠陥品である
^{ブラッディースレイフ}『血魅盲了』を使ってまで生徒会長になろうとはしない。だが、我がカリスマだけでは黒神めだかに勝てるかどうか分らなかったのだな。」

「そっか……………」

「さて、行橋よ、問答は終わったな。ならば教室へ向かうぞ。そろそろ黒神めだかも来ている頃合だろう。挨拶ぐらいはしておかなければな」

そう言っただけで都城王土は進み出した。その後を、僅かな悲しみを漂わせて行橋未造はついて行った

朝（後書き）

（行橋未造の王土レポート）

えへへ！この後書きゾーンでは
ボクが王土の異常について解説するぜ

その1

『王の才宝』《おうのさいほう》
『所持・管理』のアブノーマル
異常・過負荷を問わずに無制限にスキルを所持できるぜ

その2

『索死』《サーチアンドデストロイ》
『探知』のアブノーマル
王土を中心に半径1キロ以内の生物・無機物を問わずあらゆる物を
探知するぜ
デフォルトでは、『検索：人間』になっているけれど前述のとおり
何でも見つけることができるからね

その3

『幽心論』《プリズンハート》
『無心』のアブノーマル
心を閉ざす。それだけの異常だね

その4

『血魅盲了』《ブラッディースレイブ》
『魅了』のアブノーマル
自分の姿を見られるだけで相手を奴隷のようにできる強力な異常だ

ね（選挙の時は力をセーブしてたからね）
欠点として同じ血液型の人間にしか効かないからな。この学園では
問題ないみたいけどね

前生徒会長

箱庭学園一年十三組の教室。

キチンとクラスの数分の机と椅子が用意されておきながら、そこに居るのは一時間目の授業の開始を待つ黒神めだか1人であった。これは十三組生の登校義務の免除という箱庭学園の校則故だ。すなわち、黒神めだかは100人以上在籍する十三組生の中で数少ない例外であった。

「おはよう、黒神よ。なかなか朝が早いようだな」

「えへ！おはよう、黒神さん」

都城王土と行橋未造。彼らもまた例外の中の人間である。

「む、都城同級生に行橋同級生か。おはよう、2人一緒に登校とは仲がよいのだな」

「なに、長い付き合いだからな。さて、このままお前と授業を受けるのも魅力的ではあるが……
残念ながら、今回は挨拶と言伝だけだ」

「む？私に伝えたい事か？」

「如何にもだ。今日の生徒会執行部の活動をお前に一任する」

「……………執行部発足から2日目から怠慢か？都城同級生。」

「勘違いするなよ、黒神。偉大なる王^{オレ}としてやらなければならない

事があるのだ

我が妻となる女ならばそれぐらいは察しろ」

「……そうか。ちなみにそのやらなければならぬ事とやらの内容を聞かせてもらっても構わないだろうか」

「ふ……挨拶だよ。——元英雄へな」

そう言い残して王土は踵を返し、教室から出て行った。

そこは、おそらく誰が見ても人が1人もいないかのように閑静と
している

実際に見た目は人がいるようには見えない。……ましてや、2メ
ートルを超えるような巨漢がいようとは

――だが

「はじめまして、だな。前生徒会長”日之陰空洞”」

「……………」

――居たのだ。とんでもない巨躯の男が。

そして、都城王土はそんな彼を……誰にも知られない英雄を見つけ
たのだ

「どうした？まさか王の事^{オレ}を知らない訳ではないだろう」

「……都城王土。生徒会長だろ？」

「そうだ」

「……お前、何でそんな簡単に俺を見つける事ができた？」

日之影は自身の絶対的な強さによる異常『知られざる英雄^{ミスターアンノウン}』の力で
認識する事ができないはずなのだ。

故に日之影はそんな自分をあっさりと見つけてしまった都城王土に
困惑し警戒をした

「ふむ……………軍人1人の戦闘力を10道力とすると240万道力と

いったところか。

良からう。その1人で軍隊と戦えるような戦闘力に免じて、この王^{オレ}を上から見下ろす不敬を許してやろう」

「話を聞けよ。つーか週刊少年ジャンプの読みすぎだろう。DRAGONBALLのスカウターを持っているわけじゃあるまいし」

「ほう……よく分かったな。我が百八ある『王の才宝』の1つに『^{バーススカウター}闘視力』があることが……褒めて遣わすぞ」

冗談のつもりで言った日之影に対して王土は真面目な顔をしてそんな答えを返していた

これにはさすがの日之影も予想外の事であったようだ

「……マジであるのかよ。」

（つーかよく考えたら単位はONEPIECEだな……どうでもいいが）

「さて、元英雄。お前の問いに答えてやろう。まあ、単純な事だ……^{オレ}王の方が強いからだよ」

——尊大に、尊大に言い放った。

少なからず自分の強さに誇りを持つ日之影にとってその言葉は看過できるものでは無いはずだった

しかし、この都城王土という男に対して日之影は得体の知れない何かを感じていた

「……まあ、納得してやる。だが、こんな引退したジジイに何のようで会いに来た？」

まさか、ただ挨拶に来ました。なんて言わねーだろうな」

日之影の疑問はもつともな事だった

そんな日之影の質問に対し、声を出さずに都城王土は笑っていた

それは、微笑というには冷酷で残忍な笑みだった

次の瞬間。

日之影はその場から全力で離れていた

「ほう？避けるか。引退したと言っても英雄か」

元自分の座っていた席のちょうど自分の心臓があった辺りに右手を突き出した都城王土がいた

「お前……何のつもりだ？」

「ああ

徴税だよ、英雄」

新旧生徒会長の対決の開幕であつた

前生徒会長（後書き）

ちなみに戦闘力の計算は日本の自衛隊でした

（行橋未造の王土レポート）

……ボクの出番一言だけか……

えへへ！気を取り直して解説にいくぜ

その5

『闘視力』《パワースカウター》

『計測』のアブノーマル

相手のあらゆる”力”を数値化して透視する異常だね

知られざる英雄（前書き）

少しおかしいと思う所があるかもしれませんが
所詮二次創作と思って読んで下さい

知られざる英雄

日之影空洞が戦闘態勢に入る。と同時に都城王土の視界から日之影の姿が消える

都城王土が日之影空洞以上の強さを持つ——というのは嘘であつた

彼は『サーチアンドデストロイ索死』を『検索：日之影空洞』と1つにしばり能力の精度を上げることで日之影空洞を探知していたのだ

しかし、日之影が戦闘態勢に入り『知られざる英雄』の異常性を全開にしたため、その姿を認識できなくなったのだ

（辛うじて奴の事は覚えているが……姿は見えんな）

「ふむ……やはり借り物の能力では限界があるか」

都城王土は痛感していた。日之影空洞……彼の持つ異常の強力を

都城王土は満足していた。王自ら搾取するに値する異常性に

日之影空洞の姿が消えると同時に王土は『索死』の効果範囲を『検索：日之影空洞の攻撃』に絞り込んだ。これで攻撃がどこから来るのかを探知する事が可能になる。攻撃が見えないのは致命的だがこれで何とか対処できるだろうと考えた

甘かった

都城王土の身体が黒板に叩きつけられる
彼は全身の痛みと日之影空洞に殴り飛ばされた事を理解する
ガードに使った両腕は既に使用不能であることは明白だった

そして、認識を改める。真に恐れるべきは見えない攻撃よりこの破壊力にあることを

ここで、都城王土の弱点を露わにしておく
彼が元々持つ異常ではなく、徴税により手に入れて『王の才宝』に
貯蓄してある異常は同時に使いこなすことはできないのだ
デフォルトの自動設定ならともかく、細かい操作まではせいぜい2
〜3が限界であるし負担が大きくなる

故に、都城王土は『索死』を切り、新たな異常を発現させる

『平伏せ。』

教室中の全ての物がひしゃげていた

都城王土の真骨頂その？『言葉の重み』の力である

だが、この程度では日之影の動きを僅かの間停めるぐらいしかでき
ないことを『パワースカウター闘視力』で彼の力を見ていた王土には分かっていた

都城王土は勝負に出た

電磁波を放出して日之影の位置を把握し『ショートカット縮退路』で一気に詰め寄

り、視覚的には何もない空間へと――折れた右手を突き出した

「お前……何をした!？」

日之影は狼狽していた
彼は動きが停まったスキをつかれて心臓へと腕が突き立てられた
だが、彼の身体にはそのような痕跡は残されていなかったのだ
目の前のその張本人である、咄嗟に殴り飛ばした都城王土へと問い
詰める

「言った出あろう……徴税だと」

そう言って都城王土は立ち上がると教室の出口へと向かった

「……………帰るのか」

「ああ。たったの1割だけだったがそれでも充分だからな。教室に
関しては王^{オレ}からの対価^{サビス}だ」

都城王土は去っていった

今回のこれを戦いと称すなら傷1つ負っていない日之影の勝利であろう

しかし、日之影の心は晴れなかった

「……………教室が直ってやがる」

『言葉の重み』により潰された教室は何事も無かったかのように元の状態に戻っていた

「都城王土……………」

日之影の呟きには、ほんの少しの畏怖が込められていた

場所は時計台の屋上

都城王土は傷を完治させて”ある”作業に取り組んでいた

「それにしても、王土は優しいよね」

唐突に、側で見守っていた行橋が呟いた

「王のどこが優しい？^{オレ}申してみろ、行橋」

「だってさ、『理不尽な重税』を使う時必ず『^{マジックハンド}手者選択』で相手が傷つかないようにしてるだろ？

今回は別として、今までお前が徴税して来たのは異常を使い^{ノーマル}普通を虐げる愚民ばかりだったのにさ」

「ふん……いくら愚民といえど更生の機会も与えずに命を奪うのは暗君のやることだ」

「じゃあ、今回ののはなんで徴税したんだ？別に悪い奴じゃ無かったんだろ？」

「強すぎたからだ。1人の民が過剰に戦力を持つのは危険だからな。少し力を奪っておいただけだ」

「ふーん。あ、終わったみたいだね」

立ち上がる王土を見て行橋は作業の終わりを判断する

「ああ、『^{ゴールデンコード}王金律』による『知られざる英雄』の『支配』を完了した」

「そっか。じゃあ今日は帰ろうぜ。お前もボロボロにされたんだしさ」

「そうだな。我らが城へ帰還するでしょう」

こうして激闘の1日は終了した

知られざる英雄（後書き）

都城王土の過去が少し判明しました
水戸黄門よろしく全国を周り、異常を悪用する奴らから異常を奪い
まくっていたのが彼の中学生時代です

（行橋未造の王土レポート）

その6

『縮退路』《ショートカット》

『移動』のアブノーマル

対象との距離を0にする異常だね

弱点は対象を目で捕らえないといけないことかな

その7

『手者選択』（マジックハンド）

『選択』のアブノーマル

右手で掴む対象を選ぶことができるんだ

だから心臓だけを選択すると心臓以外は触らなくて済むんだぜ

その8

『王言律』《ゴールデンコード》

『支配』のアブノーマル

これは都城王土の真骨頂に加えていくらい重要な異常だね

あらゆる能力を支配することができるんだ

『理不尽な重税』で奪った異常をこれで完璧に王土専用に支配する

ことで元々の持ち主以上に使いこなす、疑似『完成』だね
これに都城王土の真骨頂その？を組み合わせると無敵なんだぜ

王と王子（前書き）

難産でした

手抜きっぽくなってますみません

王と王子

箱庭学園生徒会執行部の発足から幾ばくの時間が経過した
彼らは副会長黒神めだかの提案により設けられた目安箱への投書の
事案の解決を主な活動としていた

そして、今日もまた新たな事案が目安箱に投書されていた

「さて、ヒトキチ。投書の事案を申ししてみる」

尊大に命令を下しているのが現生徒会長都城王土である

そんな会長の命令を受けるのが都城王土の臣下であるヒトキチこと
人吉善吉だ

（何か心外な評価を受けたような……………気のせいかな？）

「……………カツ、分かりましたよ。今回の投書は柔道部部長の鍋島猫美
先輩から部の後継者選びを手伝って欲しいだとさ」

「ふん……………王が出向くにはつまらん依頼だな。任せたぞヒトキチ」

投書の事案に全く興味を示さない王土

だが、傍らで善吉の話を聞いていたためだかはある言葉に興味を持った

「ほう……………鍋島三年生と言えはかの有名な柔道界の反則王ではない
か」

「ああ。意外だよな、あの人部長なんてやってたんだな」

「……………待て」

善吉達が有名人の話に花を咲かせていると
先程まで興味なさそうに聞いていた都城王土が何か気掛かりがあつたのか口を挟んできた

「都城も反則王ってあだ名は聞いたことあつたか？」

「———それだ。反則王………王を差し置いて王を自称する輩がいるだろ？」

「え？」

突拍子もない王土の言葉に善吉とめだかは呆気にとられる（仮面をつけている行橋の表情は窺えない）

「フハハハハッ！！！！よかろう。この王がそいつが王に相応しいか見極めてやろう！」

高笑いからの高らかな宣言だった

「えへへ！見極めるのはその後継者だつてのにさ。ライバル意識でもあるのかよ」

「うむ。都城会長もやる気になったのは良いことだ。では早速柔道着に着替えを———」

黒神めだかの動きが制服に手をかけた状態で止まる
普段から肌を晒すことを躊躇わないめだからしからぬ様子に善吉が疑問を覚える

「あれ？着替えないの、黒神さん？」

「なに……………武道館の更衣室を借りることにする。と言っわけ早く行ってみよう」

その言葉を切つてめだかは生徒会室を出て行つた。王土と行橋もそれに続く中、善吉だけが衝撃で動けないでいた

（めだかちゃんが人前での着替えを嫌がつた？……………いや、恥ずかしがつた？）

「……………ばんなそかな！？」

彼の知る黒神めだが、変わっているのを実感した瞬間であつた

「やーやーはじめまして黒神ちゃん！柔道部部長の鍋島猫美です！今日はよろしくな」

「生徒会副会長の黒神めだかだ。よろしく」

反則王というあだ名に反して快活な挨拶をする鍋島猫美にめだかも握手で応える

「ところで……………後ろの人は会長さんで間違えあらへんよな。ウチ何かしたん？」

そう言われるままにめだかが後ろを振り向くと、目をギラギラと光らして鍋島を見下ろしている王土の姿があった

「……………何をしているのだ、都城会長」

「採点だ……………鍋島猫美、97点。文句なしに合格だ。さて、王の用は済んだ。^{オレ}後は任せたぞ黒神」

言いたいことだけ言って都城王土は下がっていった

「なあ、何だったんアレ？」

「何……………少し変わっているだけだ」

「それ、ジブンが言うん？まあええわ、それよりジブンに挨拶したいゆー奴おんねん。おーい阿久根クン！」

「ご無沙汰しております。めだかさん――」

現れて早々めだかの前に膝を付き頭を下げているのは、二年の女子に知らない人はいない柔道界のプリンス――阿久根高貴だった

「ヒトキチよ。奴は誰だ？」

「意外と知らないことが多いんだな。二年十一組の特待生阿久根高貴、柔道界のプリンスなんて呼ばれてるらしいぜ」

「侮るな、それぐらいは知っている」

「あん？じゃあ何が聞きてえんだ？」

「ふむ……聞き方が悪かったな。奴は黒神めだかの何なんだ？」

ああ、と善吉は王土の質問に納得していた

黒神めだかに心酔してしまう人間は少なくはない

だが、阿久根高貴のソレは常軌を逸しており、めだかとの特別な関係を匂わせていた

「何っーか逆なんだよ。阿久根先輩の何かがめだかちゃんなんだ」

「なるほど。中学時代『破壊臣』と呼ばれる札付きの不良だった阿久根高貴は黒神めだかに改心させられたことで黒神めだかの事を崇拜するようになったという事か」

「そうそう………ってまだそんなに話してねえよ！」

「ふん。一を聞いて全を知るのがこの王都城王土^{オレ}よ」

異常なことを当たり前にやってしまう

黒神めだかの幼なじみをやってきた経験からこういうことに慣れていた善吉はそのことを受け入れていた

そして、めだかとの話を終えた阿久根高貴がはわわんとした状態でこちらにやって来たが、善吉と顔を合わせた途端その雰囲気が一変した

「久しぶりだね虫………相変わらずめだかさんの足を引っ張っているようだな！」

「カツ！俺には人吉善吉っつー立派な名前あるんだよ。人格者で通っているんだから虫なんて呼ばずに”人吉くん”とでも呼んで下さいよ」

「フン！生意気な。だいたいめだかさんじゃなくてあんな王様野郎が会長になったのもキミのせいだぞ！」

「………誰が何だと………？」

王土の声が発せられてやっと阿久根は自分の後ろに立つ人間に気づいた

「……………キミが都城王土クンかい？」

「そうだ。それと都城会長または都城様と呼ぶがいい」

「……………」

阿久根高貴は都城王土という男の王氣に^{オーラ}圧倒されていた
決して都城王土のことを侮っていた訳ではない。仮にも崇拝する黒
神めだかを差し置いて生徒会長になった王土をただ者ではないだろ
うと認識していた

ただ、その認識を王土が遙かに上回っていただけである

「む……………！？」

突如、阿久根と対峙していた王土が先に目をそらした
その視線の先にはめだかに襲いかかろうとする柔道部副部長の城南
の姿があつた

「エロい体アアアアアアアア、へぶあつ！！」

「王・誅」

城南の下心全開の目論見は王土によって防がれた

「王の嫁に手を出そうとは……………浅はかなり」

「嫁………？嫁とはどういうことだい人吉くん？」

（……………デビルやべえ！！！！）

「ええと……………」

阿久根の尋常ではない迫力に善吉は全て洗いざらい話してしまうのだった

「なるほど……………クククッ！都城王土……………そこまでふざけた奴だったとはな」

「で？どうするんですか？」

「決まっている」

ハッキリと言い切ると阿久根は再び都城王土と対峙した

「都城王土！めだかさんをかけて俺と勝負しろ！」

「よかるっ」

こうして、キングとプリンスの対決が始まることはなかった

「ほんだらルールは無制限十本勝負VS無制限一本勝負！阿久根クンが勝つたら都城クンは生徒会長を辞任して阿久根クンは負けたら生徒会執行部に加入で文句はあらへんな！」

「異議なし！」

「異議あり！」

「なんやねん人吉クン。条件が納得いかへんのか？」

「条件はいい……………だけど都城が売られた喧嘩なのに何で俺が闘うことになってるんだよ！」

そう。王土の「ただしヒトキチが」という条件を阿久根が了承してしまったのだ

「別に俺はキミでも構わない。今までは見逃してきたがちょうど良からキミも懲らしめてあげるよ」

「ほだら勝負開始や！」

「く……………先手必勝！」

「ふん……………後手必殺！」

阿久根の見事な一本が決まり、善吉が叩きつけられる

「立て。後9本だ」

実力の差は明白の勝負だった

しかし、最後に勝利したのは善吉だった

「……………信じられへん。阿久根クンに勝ってしもた」

「鍋島三年生。貴様は天才が嫌いらしいが天才などいない。いるのはただの懸命な人間だけだ」

「黒神の言う通りだ。それと、阿久根高貴は本日をもって生徒会執行部書記職に任命する。異論はないな」

「あらへんよ。阿久根クンにはウチからきちんと三行半をつきつけ

たる」

こうして都城王土にとっては初の生徒会活動は終了し、さらに新たな役員まで確保した

王と王子（後書き）

少しオリジナル長編を考えてます

生徒会執行部が修学旅行の下見として大厄島を訪れる

そして偶然いたラスボスオレンジと生徒会で協力して戦ったり…
興味ありますか？

風紀委員

柔道部からの依頼の一件で阿久根高貴を書記に加えた生徒会執行部は、さらに部活動の予算増額を賭けた部活動対抗水中運動会で金の亡者だった競泳部トビウオ三人衆を改心させたことで、喜界島もがな（簿記一級）を競泳部からレンタルすることに成功した。

都城王土が基本的に雑務はせず行橋未造がそもそも何の役職かわからない為、実質3人で機能していた生徒会執行部にとって彼女は希望の星であった。

そして、その活躍ぶりは確かに期待以上のものではあったのだが……。

??

「ふむ。今日も見事な仕事ぶりだ。褒めて遣わずぞ喜界島」

「はっ！勿体無き御言葉で御座います王土様！！」

善吉と阿久根の目の前ではいつも通り偉そうに座る都城王土と、何故か彼に頭を垂れる喜界島の姿があった。

「…人吉くん、何故こんな事になってしまったんだったかな」

「…そうっすね。確か喜界島の仕事ぶりに感心した都城が『レンタル料一日320円は安いであろう』とか言って、3200円渡したらああなっただですよ」

「ふう……めだかさんのおかげで”金さえあれば”な思考が丸くなったとはいえ、根本的な所は変わってないみたいだな」

「まあ、誰かに迷惑かけてるわけでもないっすからね」

「そうだな。この件、俺達は見守るしかないだろう。それより人吉くん、風紀委員のうわさを聞いているかい？」

「風紀委員………？　どんなうわさですか？」

「先日、鬼瀬さんが俺達、生徒会に関する仕事を失敗しただろ？」

「あの服装指導のやつですか？　あれは丸く収まったんじゃないかなかったですか」

「いや、鬼瀬さんの失敗を快く思わない風紀委員がいるらしくてね。しかも、ソイツらが生徒会への報復を企んでいるらしいんだ」

「…………マジですか？」

「信憑性は高い情報だよ。もしめだかさんに会ったら人吉クンからも伝えといてくれないか」

「了解しましたよ」

風紀委員への警戒を強めて、善吉と阿久根はそれぞれの仕事へと向かった。

??

そのころ、黒神めだかはオーケストラ部に対する苦情を解決するため、音楽室へと向かっていた。
その傍らには、途中偶然出会った不知火とたまたま行き先が同じだった鬼瀬の姿があった。

そうして彼女らが向かった音楽室で見た光景

それは文字通りの地獄絵図だった。

オーケストラ部の物であろう楽器類が散弾銃で撃たれたかのように穴だらけになり、しかも屍の様に転がるオーケストラ部員の血で赤く彩られていた。

そんな地獄の中心に、まるで阿鼻叫喚の音色を鑑賞しているかの様に返り血に塗れながら放心している者がいた。

――風紀委員長 雲仙冥利 齡十歳ながら飛び級で箱庭学園に入学しあの十三組に所属する怪物である。

鬼瀬からもらったタオルで血を拭きながら、雲仙は入り口で佇む黒神めだかへと目をむけて言う。

「で、なんでテメーがここにいるわけ？」

この地獄を作り上げた相手に、めだかは怯むどころか雲仙を見下ろす様にして言葉を返す。

「どうやら互いの仕事がバッティングしてしまったようだが、貴様との初めての対話がこんな形になってしまっただけ残念だぞ、雲仙二年生」

めだかはチラッと周りを見渡し、再び雲仙へと視線を戻してつける。

「この光景の事情はおおよそ察しがつくが、どう見てもやり過ぎで

はないか？」

「ケケケ！ 甘えんだよ！ ルールを破った奴が罰を受けるのは当たり前だろーが！ やり過ぎだど？ やり過ぎなけりゃ正義じゃねえ！ それがオレのポリシーだ！！」

雲仙のあまりの暴論に、そのポリシーに賛同していた風紀委員の鬼瀬でさえ実際の現場を目の当たりにして茫然としている。

「不正を正すことがオレ達の唯一の目的だ。暴力も武装もただの手段に過ぎねえ。勿論黒神！ テメーと敵対するつもりも、あの王様ヤロー率いる生徒会執行部と敵対するつもりも

あるっ
っ」

雲仙が腕を振るのとほぼ同時に、上から（・・・）謎の攻撃が黒神めだかを襲った。

「今のはただのアイサツ代わりだぜ？ 見えねーまでも避けられるくらいの手加減はしたつもりだけど？」

「貴様から攻撃される理由がない。ゆえに、避ける理由がない」

「…へえ、おもしろいこと言っじゃん」

理不尽な攻撃をくらったにも関わらず、めだかは怒りもせず冷静に自分の意志を告げた。

「――雲仙二年生、生徒会には風紀委員と敵対する理由はないはずだ」

「ケケ！ テメーは聖者でオレは正義。正義と聖者は相容れねえ。どっちかが潰れるしかねーんだよ」

「それは私と貴様の問題だ。組織で争わなくても個人同士の話し合いで解決できるレベルであろう」

「ケケケ！ まだ話し合えば解り合えるとかほざくのかよ！ もうそんなレベルじゃなくなってるのによお！」

「――どういう意味だ、雲仙二年生」

「ケケケ！ 既にオレが生徒会潰しの刺客を放っちまってるとことだよ！！」

「……………愚かなことをしてくれたものだな、雲仙二年生。そんなことをしては都城会長が黙ってないぞ」

「心配はいらないぜ、黒神。あの王様ヤローアブノーマルにはとっておきを差し向けたからよ！ 目には目を、十三組には十三組アブノーマルをな！！」

？
？

箱庭学園屋上

「偉大なる王^{オレ}が問う、おまえは誰だ？」

王土の前には、仮面を被り、腰にベルトを巻き、マントを纏った男がいた。

「我が名は肥後進……風紀委員副委員長……」

感情のない、機械のような声が流れる。

「……………行橋、俺の後ろから動くな」

「うん。分かったよ、王土」

行橋を庇うように王土が前に出て、仮面の男と対峙する。

「……………貴様ら悪を……………ボスの命令により駆逐する」

風紀委員と生徒会執行部の戦争、その開幕戦の火ぶたが切って落とされた。

風紀委員（後書き）

オリキャラは一発キャラです
とくにストーリーに関わったりはしません

正義との激突（前書き）

拙い文章でのバトルですが、よろしくお願いします

正義との激突

肥後進が王土めがけて突進する。

疾風のごときスピードで十数メートルの距離を駆け抜ける。

しかし王土は、己に迫る修羅を前にしても余裕の態度を崩すことなく、疾風よりも早く言葉を紡いだ。

『止まれ。』

ただ一言。

それだけで肥後進のありとあらゆる動きが、彼の意思を無視して停止させられた。

普通ならばここで戦闘終了。

都城王土の圧政に逆らうことなどできない。

だが、肥後進もまた異常。
アブノーマル

普通などという尺度では計れない怪物。

彼が正義を掲げる限り、敗北という運命は有り得ない。

「お…………お…………お……………」

「……………ほう?。」

ピクリと、彼の指が動いた。
やがてそれは身体全体へと広がっていき、遂に王土の支配を完全に
抜け出すに至った。

「おおおおお——！！」

「ははっ！ 王^{おれ}の圧政に逆らうか。面白い、次は本気で言くぞ——
『平伏せ。』」

先ほどとは比べものにならない程の重みで言葉が放たれた。
だが、肥後進は平伏すどころか、少しも突進のスピードをおとすこ
とがなかった。

「な——！！」

予想外のことに次の手を打つことができない王土に、彼のタックル
を防ぐことは叶わなかった。
2人はそのままの勢いで、設置されていたフェンスを突き破り屋上
から落下を始める。

今の体勢では自分から地面へと叩きつけられてしまうと判断した王
土は『知られざる英雄』を発動させる。
これにより王土を認識できなくなった肥後進の拘束が緩む。

この隙について王土は肥後進を自分から引き剥がし、日之影クラスの怪力で地面へと投げつけた。

そして王土は強化された身体能力で着地を決める。

王土はこれで決まりだと考えたが、全身ボロボロになりながらも肥後進は立ち上がってきた。

だがそれは無駄なこと。

『知られざる英雄』で認識されない王土に一方的になぶられるだけのはずだった。

しかし立ち上がった肥後は、屋上での突進より遥かに速いスピードで正確に王土へと迫り、拳を振り上げた。

王土もそれを迎撃しようと構え、互いの拳が激突した。

「ぐうつ!？」

結果、力のぶつかり合いは肥後進に軍配が上がった。

日之影と同等の力を発揮していながらも負けたことに疑問を感じた王土は『闘視力』で肥後を視て絶句する。

肥後進の全ての能力が脅威的な速度で上昇していた。

視力、聴力、思考力、腕力、脚力、膂力、瞬発力。

あらゆる”力”が既に自分を凌駕しながら、尚も強くなっていく肥後進にさすがの王土も戦慄を禁じ得なかった。

そして再び、肥後進が王土に襲いかかる。
迎撃も防御も無駄と判断した王土は苦渋の決断を下す。

肥後の攻撃が当たると思われた。
だが、王土に当たることなくその身体をすり抜けていった。

ホロウアライズ

『幻実感』

まぼろし

自分の存在を幻にする異常。

王土は高いプライドからこういった逃げの能力を嫌っている。
それを使わざるを得ないほどの状況に追い詰められている証拠でも
あった。

王土は状況を挽回するために、『天知解闢』

ジェネシス

『解明』の異常

——で肥後進の異常を知る。

それはあまりにも単純で最強な異常だった。

肥後進の異常 『悪戦駆討』

ジャスティス

正義は必ず勝つ、という絶対的運命を確約する異常。
単純にして無敵の異常である。

故に、王土は決断した。

己の有する禁じ手（マイナス）に手を出すことを。

瞬間——運命が歪んだ。

？
？

倒れ伏す肥後進の左胸から手を抜く。
もちろん外傷はない。

「ふん。寛大な王も^{オレ}今回は少し頭に来了。悪いが5割はもらっていいぞ」

屍のようにくたばる肥後進から返事はない。
校舎の方から行橋が駆けつけて来るのに気づく。
おそらく、戦いの終わりを察したのだろう。

「王土！ 大丈夫かい？」

「当然だろう行橋。この程度は問題ない」

「無理するなよ。過^{アレ}負荷を使っただろう。王土の心、少し歪^{マダ}んでいるぜ」

「ふっ。お前に隠し事はできんな。だが、それでも大したことではない」

使用したのは過負荷（マイナス）。

ドラマティックディストーション
『曲伏戯』

ありとあらゆる事象を『歪曲』する過^{マイナス}負荷。

これにより、肥後進の異常は”正義は必ず敗北する”ように歪^{マダ}ってしまったのだった。

「これは風紀委員からの宣戦布告とみていいだろう。いくぞ、行橋」

「OK 黒神さん達と合流しなくちゃね」

これはまだ序戦。

風紀委員長、雲仙冥利との戦いこそが真の戦い。

その時は——近い。

正義との激突（後書き）

（行橋未造の異常・過負荷レポート）

その9

『幻実感』《ホロウリアライズ》

『幻惑』のアブノーマル

この異常は簡単にいえば幽霊属性になる異常だね。
ただしインターバルが必要で連続使用はできないんだ

その10

『天知解闢』《ジェネシス》

『解明』のアブノーマル

知りたいことをしることができる異常だね
未来を知ることが無理だね

その11

『曲伏戯』《ドラマティックディストーション》

『歪曲』のマイナス

いろんなものを曲げる／歪める過負荷だね

過負荷としての正しい使い方は相手の心や身体を捻曲げて性格を変えたり、腕を引きちぎったりするよ

番外1

『悪戦駆討』《ジャステイス》

『運命』のアブノーマル

正義は必ず勝つって運命を決めちゃう異常だね

自分が正義で相手が悪だと信じ込みだけでOKなんだぜ
ただし、スロースターターな能力なんだよ
ピンチからの逆転が正義の味方のお決まりなんだって
だからといって速攻で殺してもあっさり蘇生するから注意だね

乱神モード（前書き）

どうぞ、よろしくお願いします。

乱神モード

都城王土が戦闘を終えたところ、黒神めだか以下の生徒会執行部は生徒会室にて、風紀委員長 雲仙冥利と対峙していた。彼らの間に、不穏ではない空気が流れる。

そんな中、先に切り出したのは黒神めだかであった。

「それで、一体生徒会に何の用だ、雲仙二年生」

「ケケ！ 何の用だ、とは冷てーこと言うじゃねーか。オレがテメーら生徒会に刺客を放ったことを怒ってんのか？」

「別に、誰1人傷つくことなく終わったことだ。初めから怒ってないさ」

「ケケケ——ッ！！」

めだかの言葉に対して雲仙は、犯しそうに笑った。

そんな雲仙の様子に、生徒会の面々は怪訝そうに表情を歪めていた。

「誰1人、ね。テメーが守ったのは、テメーの後ろにいる奴らだけじゃねーか。肝心のここには居ねえ会長はどーしたんだよ？」

「あの人に、私の助けなどは不要だ。どうせすぐに戻って来る」

突き放すようなめだかの言葉ではあったが、それには確かな信頼がこめられていた。

そんなめだかの言葉を受けて雲仙は、変わらない狂笑に僅かに苛立ちを含ませていた。

「ケツ！ 甘えよ、黒神。さっきも言ったが、オレが王様ヤローに差し向けたのは、ヘタすりゃオレ以上の化物！^{アフノーマル} 某所じゃ^{トップ・オブ・ヒ}常勝不敗^{イロ}なんて検体名（ふたつ名）で呼ばれているキチガイヤローなんだぜ！ 今ごろ王様ヤローは、アイツの正義の名の元に殺戮されて

「—— ほう？ 誰が、どうなっているだ？」

生徒会室にいた全員の視線が、入り口へと集中する。

そこには、扉の前にいた雲仙を見下ろすように、都城王土が君臨していた。

そんな王土を、雲仙は信じられないものでも見てしまったかのように、表情を驚きに染めていた。

だが、すぐに自分を見下ろす王土に対抗して、視線に殺気をこめながら睨み返し、

「——ッ！」

王土に対して、己の編み出した不可視の攻撃を繰り出す。
合計で8つの軌跡を描き、王土へと八方から正体不明の攻撃が襲いかかる。

「——ふっ」

しかし、雲仙の攻撃が王土に届くことはなかった。

雲仙の放った飛び道具「——超^{スーパードール}躍弾」——は王土の身へと届く前に、力尽きたかのように動きを止め、重力に引っ張られていく。

「さて、挨拶は済んだか？ 雲仙冥利」

「ケケケ！ コイツア参ったぜ。このテクで一年以上やってきたんだが、まったく通用しないとはな。降参だぜ」

雲仙は降参の意を示すように、制服の両袖から隠し持っていた”超躍弾”を全て捨て去る。

「まあ、肥後ちゃんを退けて来るんだから、こんな子供だましが通
用するわけねーよな」

「ああ。奴の革命は中々のものだったぞ」

「そいつぁ、風紀委員長としては嬉しい限りだぜ」

「ふん………それで？ 単身で我らの本陣に乗り込んできた意図は何だ？」

「ケケケ！ それはよ、テメーに1つだけども聞いてえことがあるんだよ」

「ほう？ 許す、問うてみよ」

「ああ、そいつはな――」

話しの間を狙い、雲仙の両手に再びエモノが握られる。

”超弾躍”ではない。

それは、マツチ箱だった。

これが意味することは――

「――！ まずい！ これは火薬玉だ――！」

「おせエよ、ボケ」

めだかの叫びも空しく、つんざくような爆音と閃光が炸裂し、生徒会室を包み込んだ。

？
？

いくつもの火薬玉の同時爆発により、生徒会室は視るも無惨な有様へと変貌していた。

そんな中、砕けた壁の下敷きになっていた雲仙冥利が最初に姿を現した。

風紀委員の証でもある白い制服の汚れをはたき落としながらの、ゆううつとした登場だった。

信じられないことに、雲仙はこの爆発の中を傷一つ負うことなく、制服が汚れる程度の被害で済んでいたのだ。

風紀委員会特服『スノーホワイト白虎』の最新科学による性能の賜物であった。

「ケツ！ 思ったより爆発の被害が小せエ……………いろいろと猪口才な真似をしてくれたようだか、そんなのは焼け石に水——！
？」

雲仙は目の前の光景に瞠目する。

自分と同じく服以外に被害の見られない生徒会執行部の姿が、そこにはあった。

——都城王土を除いて、だが。

「黒神！ テメー一体何をした！？」

焦燥に駆られるように、雲仙は叫ぶ。

その焦りはもつともだ。

仮にも己がそれなりに命がけで行った策が無に帰したのだから。

「……………簡単なことだ。爆発の恐ろしさは、爆熱よりむしろ、爆風にこそある。だから私は、三人を咄嗟に壁際のロッカーに詰め込んだ。扉を外から閉めなければならなかったので、私は外に残ったがな」

「……………！？」

感情のない声でつらつらと述べられたその内容に、雲仙は黒神めだ

かの異常性を再認識させられた。
最早、雲仙は黒神めだかのそれにヤケ糞気味な感動すら覚えかけていた。

「ケケケケケ！ いや本当スゲーわ。その聖者っぷり気持ち悪いーっ！ そんでやつぱり？ この期に及んでもどうせテメーは争う理由なんかねーって言うんだろ？ 仲間もオレも傷つけずに済んで……… って王様ヤローがいねーじゃん。もしかして吹っ飛んじまっただか？ 残念だったな黒神！ めでたしめでたしのハッピーエンドには、どうやら無らね——」

「うるさい」

「——！！」

めだかが声を発して、初めて雲仙は気づいた。
めだかから、はちきれんばかりの怒気が溢れていることに。

「……………哀れなことだ」

すくつと、ボロボロの制服のまま、めだかは立ち上がる。

「貴様もかつては、人の善性を信仰する、心優しき美少年だったに決まっている。情状酌量に値するだけのきっかけがあって、そのよくな残虐無比な性格を帯びてしまったとしか考えられん。」

「だが私は貴様を許しはしない!!」

めだかから、瀑布の如き威圧感が発せられる。
それをモロにあびた雲仙は、思わず後ざする。
睨んだだけで。
凄んだだけで。

黒神めだかは、雲仙冥利を圧倒した。

「私の聖者っぷりが気に入らないんだって? 雲仙二年生」

黒神めだかがゆっくりと、歩み出す。

ちょうど、爆発のショックで気を失っていた善吉達が目を覚ました。
そして黒神めだかの豹変を目の当たりにし、乱神が目覚めたことを
悟る。

「……………黒神めだかの真骨頂その? 『乱神モード』 こうなったら

誰にもめだかちゃんを止めることはできねー」

目を覚ました善吉達に目もくれず、めだかは突き進む。

「いいだろう。ならばがっかりさせてやろう。私が怒りにまかせて暴れてしまうような、くだらない人間だということを教えてやろう
！！」

このままでは、黒神めだかと雲仙冥利と激突してしまうのだろう。

善吉の言う通り、黒神めだかを止められ者はいないのだから。

……………本当にそうだろうか？

本当に、黒神めだかを止められ者はいないのか？

いや、いる。

都城王土を、善吉は忘れている。

「その必要はない、黒神。お前は十分よくやった。後は王^{オレ}に任せて寝ているがいい」

王土の言葉がめだかの耳に届いた瞬間。
めだかの身体が崩れ落ちた。
それを、王土は優しく抱き留める。

「行橋、頼んだぞ」

「OKだよ、王土」

めだかを渡した王土が、雲仙冥利へと向き直る。
彼を睨みつける獅子の如き双眸は、憤怒の色を帯びていた。

——頂上決戦が、開始される。

乱神モード（後書き）

「行橋未造の異常・過負荷レポート」

その12

『籠もり歌』《ナイトメアマーチ》

『催眠』のマイナス

王土が黒神さんに使った過負荷だね。

自分の声を聞いた人間を強制的に睡眠状態にして、夢を見せたり頭の中で歌を繰り返し流したりするんだぜ

過負荷としては悪夢を見せるのがベターだね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4637u/>

おうどキングダム

2011年10月9日04時49分発行